

# 鉄喰らう獣の懐古談

畑渚

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

エフィーターがロドスに入る前のお話

# 目次

鉄喰らう獣の懐古談

---

1



# 鉄喰らう獣の懐古談

暗闇を駆け抜ける影。エフイーターは何かから逃げるように路地を走り、突き当りの家へと飛び入る。

真つ暗な部屋が、突然の暖色の照明に照らされる。丁寧に配置された家具の一つ、そのソファに腰掛けていた人物が立ち上がる。

「待つてたよ」

「通してくれない？」

「それはできない相談つてもんだよ。私がここに立っている限りはね」  
壁の方へと歩き、立て掛けてある槍を手にとつて構える。

「まつたく、結局はコレしかないか！」

エフイーターは残念そうに、しかしどこか嬉しそうに拳を構える。

先に動き出した相手は、殺意を乗せてまつすぐに槍を突き出す。それをわずかに半身をずらして避けると、エフイーターは一步近づく。あて先を失つた槍は、それも想定内

かのように一瞬で元の位置へと戻り、空を切り裂きながら二撃目となりエファイターを捉える。

エファイターは槍を避けつつ、椅子へと手を伸ばす。

「うおおあああああ！」

槍が引かれるよりも早く、椅子で叩き落とす。そして今度は、無手の相手に対して椅子を持ったエファイターが襲いかかる。

振り回された椅子を、ソファの後ろに潜り込むことで避ける。追うようにソファの背もたれに駆け上ったエファイターに、飛びかかって椅子を手放させる。

マウントポジションをとられたエファイターだが、相手の拳を防ぐ。一瞬の間をついて相手の顎を突き、よろめいたところで体勢を立て直す。

一度距離をとって、二人とも立ち上がって構え直す。激戦の疲れすら感じさせない二人だったが、エファイターは相手の体がブレたのを見逃さなかった。

この一撃で決める。

その強い意思を込めて一步を踏み出す。二歩目は奇妙なほど静かに、そして三歩目、拳の届く距離で――

「カットオ！」

その言葉で相手が倒れた。エフィーターは慌てて駆け寄る。顎に綺麗に入ったからだろうか、軽い脳震盪のようだった。

「大丈夫!?はやく救護班！」

いつものように控えていた救護スタッフが、的確に応急処置をしていく。意識を取り戻すのに、それほど時間はかからなかった。

「ごめん！」

「まったく……私じゃなかったら死んでたよ」

「ついつい力が入っちゃってさ」

「ついで殺されたら三途の川も見られないよ」

「こんどお酒奢るからさ！」

「つたく、そんな餌で釣られ——」

「美味しいお刺身もつけちゃう！」

「……仕方ないなあ」

二人が笑い合っていると、監督が駆け寄ってくる。

「まったくおまえらは加減を知れ」

「でもいい画が撮れたでしょ？」

「まあ、その点に関してはな」

爛漫に笑うエフイーターに、監督は頭を搔く。

「おまえの拳についていけるのはこいつくらいなんだ、潰さないでくれよ」

「この程度じゃなんともない。ほら早く次のシーンを」

「バカモン、今日はもう終いだ。次は……期間が開くな、来週だ」

監督はぺろつと指をなめて、スケジュール帳をめくる。

「ああ、それと」

監督はエフイーターに封筒を渡す。

「お前宛に届いてたぞ」

「ん？なんだろ」

封筒を受け取り、差出人を見る。顔が、ピクリと動いた。

「なんだったの？」

「いや、なんでも。それよりいつ呑みにいく？」

「明日は？」

「明日はく予定が入っちゃってるわ。明後日でもいい？」

「うん、私はいいいけど」

「それじゃあたしはこれで！お疲れ様〜！」

スタツフ全員に適当に声かけてから、エフイーターはスタジオから出ていった。

「大丈夫かおまえ」

「監督……、実際ヤバかったです」

「だろうな」

監督は啜えていた飴を噛み砕く。

「あいつは……おまえがコントロールしてやってくれよ」

「突然何ですか」

「あいつにとっしておまえが、唯一加減せずに立ち回ってくれる相手なんだ。だから白熱

したら今日みたいに我を忘れるかもしれないねえ」

その実、顎に喰らうという立ち回りはしないというのが決まりだった。でないと、相手が本当に潰れてしまうからだ。しかし、エフイーターは今日、その禁忌を破った。

そんな大事なことですら忘れてしまうほど、夢中になってしまっていた。

「監督の止めが入らなきゃ、今日が私の命日だったかもしれないねえ」

「……、めったなこととは言うもんじゃない」

監督はさらさらと何かを記し、渡す。

「知り合いの病院だ。いちおう見てもらえ」

「は〜い」

気の抜けた返事をしながら、荷物をまとめて帰る準備をする。

「ん…………これは？」

自分のものではないゴミが入り込んでいた。広げてみれば、どこかの企業のチラシであつた。

「ロドスアイランド……、ふーん」

見覚えのない製薬会社のチラシなど、まさにゴミだった。ゴミ箱へと投げ捨てると、自分の荷物だけもってスタジオから出た。

||\*||\*||\*||\*||

「遅い……」

苛立ちを隠しきれず、トントンと机を指で叩く。仕方もない。撮影が、未だに始まらないのである。

あれから一週間。呑みの約束をすっぱかしたのはどうういう了見なのか問い詰めよ

うときた撮影日、未だに彼女が現れる気配はない。

「監督？」

「ああ、もう少し待ってくれ」

スタッフはなにやら慌ただしく動き回る。監督も先程から電話をかけまくっては連絡先にばつ印をつけていつている。

「つたく、あいつはいつたい何してんの」

発信履歴に並ぶ同じ番号を見る。ここ一週間、何度かけても不通のままだった。

「監督？」

「……、ダメだな」

「どういうことですか」

「わからん、電話も不通、家にもいないようだ。ダメ元で親戚に連絡しても情報なし」  
「じゃあなんすか、逃げたってことですか」

監督は答えなかった。いや、答えるわけがなかった。エフィーターが、撮影が嫌だから逃げるとは考えられなかった。

「明日までに見つからなかつたら警察機関に届け出る」

「そんな！じゃあこの映画は」

「おじやんだ。どちらにせよな」

監督のその言葉を聞いて、乱暴に荷物をまとめ始める。

「どこに行くつもりだ」

「私のほうでツテをさぐってみます」

できれば使いたくはなかった手である。しかし、エファイターがいなければこの映画は成立しない。

「私だって、この映画に賭けているんだから」

エファイターがこの映画で賞を狙っていることは、周知の事実だった。しかし、映画は一人では成り立たない。人生を賭けてこの撮影に臨んでいる者だっているのだ。

※※※※※※※※※※

「それで、私のところに来たってわけか」

「姐さんくらいしか、私には頼りがないもんですから」

長身の女性に、土下座してまでも頼み込む姿は、画面の向こうで悪役を演じている者の所作ではなかった。

しかし、これが唯一にして最後の一手だった。

「残念ながら……、情報はなし」

「そう……ですか」

「力になれなくてすまない」

「そんな、姐さんが頭を下げる必要なんてないですよ」

立ち上がって土埃を払う。踵を返したところで、引き止めるように声がかかる。

「戻ってくる気はないのか」

「言葉にしなきゃいけないですか」

「いや、いらんことを聞いたな」

振り返って深々と礼をし、そして出口へと向かっていく。

「灯台下暗しって言葉がある。案外近場にいるかもな」

扉を閉じる前に、それだけ聞こえる。何もなかった手がかりだったが、一つ心当たりができた。

||\*||\*||\*||\*||

「灯台下暗し……か」

撮影セットの中を歩く。もう日は沈み、スタツフもないスタジオは照明がなければ真っ暗である。

開け離れた入り口から差し込む月明かりを頼りに、セツトの中を練り歩く。

「さすがは姐さんだ」

「どうしてここがわかったの？」

映画の最終決戦のための舞台の上に、エフイーターはいた。撮影のときとは逆に、肌をまったく晒していない。わざと隠してるようにも見えた。

「なんとなくここにいるんじゃないかって」

警備員には無理を言っ通してもらっていた。だからそこまで時間はない。

スツと拳を構えると、エフイーターは静かに首を横に振った。

「……？どうして？」

「あたしはもう無理。あんたとは戦えない」

出鼻をくじかれたといった気分だった。拳で打ちのめして、それからまたいつもどおりだと思っていたからだ。

「いいから構えてよ」

「無理だっって言ってるじゃん」

そう言っつて、エフイーターはズボンの裾をまくる。出てきた右足首には、明らかに自然ではない痕跡が刻み込まれていた。

「……鉋石病」

「そう。だからあんたと組み手はもうできない。はは、スターになるのも無理かな」  
エファイターは無理して笑ってみせる。

「あたしはね、ヒーローになりましたかったんだ。画面の向こう側の皆が魅了されるような」  
窓の外を見上げると、ちょうど月明かりが差し込む。

エファイターの方へと一歩踏み出す。

「あたしもね、憧れたんだ。あるアクションスターに。この力にこんな使い道があるんだって教えてくれたんだ」

いつでも撮影できるようにと整えられたセットから、剣をとりだす。

エファイターの方へと二歩目を踏みしめる。

「ねえ？ちよつと、だから戦えないって」

「剣なら身体は触れないでしょ」

「だからあたしは」

三歩目を皮切りに、いっきにエファイターへと詰めよる。慌てて近くの剣を取って斬撃を受ける。

「ちよつとまって！」

「待たない」

「もう！」

力で無理やり突き返し、エファイターは体勢を立て直す。

「言つて聞かないなら力でわからせるまで！」

「それでこそ」

瞳に、純粹な殺意が灯り始める。

どちらからともなく、動き始める。振るわれた剣は、空を切る。最低限の動きで避け続ける。まるで打ち合わせていたかのような打ち合いだった。

エファイターは、次第に洗練されていく動きをしつかりと捉えていた。いまでこそ一方的に剣を振るえている。しかし、すぐに相手の剣にのまれてしまうと本能的に感じ取っていた。

「じゃあこれならー！」

またもや、夢中になりすぎた。剣をフェイントとした足技。よく使う手ではあった。しかし、その振るわれた右足には、鉋石病の痕跡がある。直接の接触は、避けるべきだ。

「しまつ」

後悔してももう遅かった。遠心力の乗った足はそう簡単には止まらず、しなりを持って相手の首をかりとろうと迫る。

「そうだね、こんなのはいらぬよね」

剣が落ちる音がする。両手をつかつた腕による防御で、右足はピクリとも動かなく

なってしまうた。

「ほらボサツとしてたら死ぬよ！」

エファイターがほぼ反射で避ける。撮影中では禁忌の顎狙い。一瞬でも避けるのが遅れていたら、あたっていただろう。

「ッのっー」

拳を握りしめる。入れてはいけないスイッチが入る感覚。人を傷つけないように長らく封じ込めていた力が、じわりじわりとにじみ出てくる。

エファイターは笑っていた。久しく忘れていた、真剣勝負の感覚。いつもは抑えていた感情が、むき出しになる。より本能に近い部分での戦い。相手か自分かが止まるまで終わらない戦い。それが楽しくて楽しくて、仕方がなかった。

「どうして止めるの」

マウントポジションをとったエファイターは、その問いに即答できなかつた。もうガードする体力も無いのか、相手は無防備だ。拳を振り下ろせば、確実に勝つことがで

きる。しかし、その手は振り下ろされる前に止まった。

「私は人殺しになりたいわけじゃないから」

「ヒーローなんですよ。悪役は殺さなきゃ」

「わかってる」

エライターは立ち上がって、そして手を差し伸べる。

「あんたは悪役じゃない。だからこれで終わり」

納得いかない様子で、地面に身を投げ出している様子を眺める。

「撮影にはもう戻らない」

「うん」

「女優もやめる」

「うん」

「だからもう、追ってこないで」

「……うん」

エライターは使った剣を片付けて、それからスタジオから出ていこうとする。

「待って」

「……なに？」

「ヒーローは、辞めないで」

「無理だよ」

満身創痍のはずが、フラフラと立ち上がって何かを投げつけてくる。エフィーターは難なくキャッチした。

「これは……製薬会社のチラシ？」

広げれば、ロドスアイランドという会社のチラシだった。

「どういう風の吹き回し？」

「そこに行つて。行けばわかる」

ボロボロだというのに無理に動こうとするのを止めるには、了承するしかなかった。

「わかったから！動かないで！」

その言葉を聞いた瞬間、相手は崩れ落ちた。駆け寄つてみると、息は整っている。疲労と怪我で、意識を失つたようだった。

サボつて漫画を呼んでいた警備に救急車を呼ぶように行つてから、エフィーターはスタジオから出る。

「ヒーローか」

右手には、ロドスアイランドの広告が握りしめられていた。

||\*||\*||\*||\*||

『今年の最優秀俳優賞は!』

テレビから、そんな声が聞こえてエフイーターはつい目を向ける。そのスポットライトを浴びる人物を見て、笑顔が漏れ出る。

「あ!この人見たことある!」

「映画の役者さんでしょ!」

「悪者をバツタバツタ倒してるのみたことあるよ!」

子供たちに質問攻めにあいながら、エフイーターは「実はね」と切り出す。

「えっ?この人とエフイーターお姉ちゃんで映画に?」

「何回もね。すごく強いんだよ」

「エフイーターお姉ちゃんよりも?」

「うくん、どうだろ」

普段なら余裕だと豪語する彼女らしからぬ発言だった。

「よし、それじゃあ映画見よつか!」

子供たちは騒ぐのをやめて、利口にスクリーンの前に座る。

「あつドクター!ドクターも一緒にどう?」

肯定の言葉を返してきたドクターを引き込み、上映を始める。

「どんな映画なのか？ そうだね……」

少し考えて、そして口を開く。

「まだ悪役を演じていた頃の、私にとってのヒーローのお話」